

《史料研究》

1970年サンフランシスコにおける日系アメリカ人史学習の教材開発（5）

田中 泉

<構成>

1. はじめに
2. 時代背景
 - (1) エスニック多元主義
 - (2) 戦後の日系アメリカ人社会
3. 4つの教材
 - (1) 教材A
 - (2) 教材B
 - (3) 教材C
 - (4) **教材D** …（パートIおよびパートII-1～3まで前号掲載済、パートII-4・5 本号掲載）
4. 分析（以下、次号掲載予定）
5. おわりに

パートII

4. 公然と表された偏見

圧力団体の煽動方法

アメリカで1900年から1940年までの40年間において、日本人に対し行われた煽動は、概して、次のようなステレオタイプの性格を中心に展開された。

- 1) 非同化性：移民に関する上院の公聴会で、日本人排斥連盟の特別代表でもあるザ・サクラメント・ビー紙の前オーナーは、次のように発言した。

日本人は、我々の法律において不適格な他のどんな人々と比べても同化的でなく、わが国の住民として危険である。・・・大いなる民族的な誇りによって、彼らは混血という意味で同化しようという考えをもっていない。彼らは、民
--

族的なまた国家的なアイデンティティを捨てようというどんな願望も意志もなくここに来た。彼らは、明確にそして公然と、誇り高き大和民族を永久的にここに植え付け、定着させることを目標としてやってきた。

初期にはアジア人排斥連盟と呼ばれた日本人排斥連盟は、「我々は我々自身を侮辱することなく彼らと同化することはできない」という声明を原理とした。

- 2) 低レベル生活：1905年、カリフォルニア州議会は、連邦議会に向けて、移民の許可数を制限することを求めることを議決した。

日本人労働者は、土地を買ったり、家を建てたり買ったりしない、ほんの一時の滞在者である。彼らは、この州の発展に何も貢献していない。彼らは、その富を増やそうとしないので、経済に影を投げかけ、繁栄に対して大きく差し迫った危険となっている。

日本人排斥連盟は、「我々は、低レベルの文明、生活、賃金の人々と競争することはできない」という声明を原理とした。

1906年、ザ・エグザミナー紙は、「日本が、我々の海岸を調べている。褐色の男たちが地図を持って、簡単に上陸できるように」という見出しでスパイを警告した。そして数日後、反日本人活動への最初の寄稿において、次のような誤った主張がなされた。

40の日本人団体が、(ハワイで)週に2、3夜、夜間の歩兵訓練をしている。ハワイの日本人は、その全人口が7か月間は食べていけるだけのコメを秘匿している。最近、クーリー(苦力)を装った日本人が数隊ほど到着した。彼らは、秘かに戦争を準備している。

1907年、ハースト紙に、リッチモンド・ピアソン・ホブソンという、海軍の英雄から連邦議員になった人物が連載している。「日本は、太平洋の斜面に取り付いている」という見出しのもと、ここに黄色い禍があり、日本に対する民族的戦争が起こっていると告発した。

1920年の選挙の前夜、第一面に、日本人に関する次の2つの見出しがでた。これは、外国人土地法に関して手始めに、投票に影響を与えようとするものであった。

ジャップが少女を襲い、母親にぶたれる。

土地法立法の戦いのために、日本の国庫から金が州に注がれている

2つ目の見出しは、日本人コミュニティが含まれているがいまいが、外国人土地法に反対の立場の組織に対するものであった。

- 3) 高い出産率: カリフォルニア州知事ステファンは、1920年に、「日本人の多産は、他の人々のそれをはるかに上回っている」と書いた。
- 4) 下劣な習癖: 1905年の決議においてカリフォルニア州議会は、さらに、日本人は「ふしだらで、大酒のみで、喧嘩っ早い男たちで、スズメの涙ほどの手当の仕事に縛られ、白人の男なら我慢できないような衣食住で生活している」と述べた。

あるカリフォルニアの下院議員は、「日本人の大多数は、『道徳』という言葉の意味を理解していないが、世界のどの国においてより普通に、ただ文明人のふりをして不道徳な習癖をやめようとする」と主張した。

煽動が始まった場所

国際連合の誕生地になる前の40年間、サンフランシスコは、反日本人運動の発生地であり、運動は盛衰を経て、第二次世界大戦の間に上昇し続けた。早くも1880年代には、ザ・コースト・シーメンズ・ジャーナルという労働誌が、「ジャップ」という言葉を使い始め、合衆国内に日本人が存在することに対して抗議することを始めた。

サンフランシスコの労働者組織である中央労働組合は、実力行使、論説による非難、商売上のボイコット、大会決議、心情を表した公式記録などを利用し、また、反日本人団体や政党を支援した。

煽動において労働者の役割が最も大きかったのは、1900年代初めに、日本からの移民の流入が増加した時である。その役割は、日本人がもはや競争しなくなった1920年代には小さくなった。一方で、小規模農家の組織による運動は、日本人が農業において競争相手になったために活発化し、農村地域が煽動の中心地となった。

日本人排斥連盟

2か月間に及ぶ「ザ・オーガナイズド・レイバー」誌のアピールに応える形で、1905年、日本人および韓国人排斥連盟が創立された。これはのちにアジア人排斥連盟、さらに日本人排斥連盟となった。200以上のカリフォルニアの労働組合が、友愛団体や政治的グループ、市民的グループ、軍隊的グループとともに、連盟に加入した。この連盟は、白人とアジア人は同化しえないと断言し、北アメリカの土地は、現在および将来のすべての世代にわたりアメリカ人のために保存するという目標に専念した。

1年後、連盟は、日本人が扱う食品に触れることは危険だと市民に警告し、日本人の店をひいきにしているアメリカ人に苦情を言い、その店に入ろうとする人の写真を撮ると脅した。2、3か月後、日本人のレストランのボイコットが組織され、正面に監

視員が立ち、「白人の男性と女性は、自分たちのレストランをひいきにしよう」と書かれたマッチ箱が配られた。

1920年には、連盟が再編され、日本人排斥連盟として知られるようになった。連邦上院議員 J.M.インマンがその会長に指名され、V.S.マクラッチーが常務理事となった。マクラッチーは、その経歴と縁故によって連盟内で権力を持ち、「聖なる目標」にすべての時間をささげた。副会長職は、「黄金の西部の息子たち」(1)、アメリカ退役軍人会、カリフォルニア州労働総同盟、カリフォルニア婦人クラブ連盟、カリフォルニア州農民共済組合、農業局、および「ムース忠誠団」(2)に割り当てられた。

1920年の外国人土地法案の可決により、連盟は、日本人による土地の取得は停止できたと考え、全面的な排斥への運動を強化し始めた。一世に対する差別的な立法の必要性和世界情勢における日本の勢力拡大とは関係がある。2つの小説(後述)と全国的な新聞・雑誌の政治が、黄禍論に注意を向けた。

この連盟は、一般的に排日移民法と呼ばれる1924年の移民法が可決した時に、消滅する。

新聞と煽動

1906年、カリフォルニアの主要な新聞のうち、ロサンゼルス・タイムズ紙を除くいずれもが、中国人、日本人、韓国人の子どもを巻き込んだサンフランシスコの学校の隔離事件に関して、テオドア・ローズヴェルト大統領が干渉したことを、公然と非難した(後述)。大統領は、日米関係への悪い影響を考慮して干渉したのである。

1910年、新聞は、第一次世界大戦後までは匹敵することがないくらいの段階まで激しく反日本的になった。新聞は、日本人移民による「平和的侵略」と「安価な労働」競争者について、カリフォルニアの大多数の人々がその主張を真実であると納得するまで、主張し続けた。

1920年には、外国人土地法について、日本人が農業用地を借りたり、二世の子どもの名前で買ったりすることを禁止することなどにより抜け穴をふさぐという、独創的な方法に賛成する投票者を獲得するキャンペーンをおこなったが、カリフォルニアにある100の新聞の内、その方法に反対したのはわずか5つの新聞だけであった。

第一次世界大戦中は、日本が連合国側についたため、反日本的な煽動は収まった。しかしながら、戦争が終わると、日本がヴェルサイユにおいて積極的に平等な扱いを求めたこと、また日本の韓国での行動に対する反動として、反日本的なキャンペーンは強烈となった。その時、多くのアメリカ人にとっては、文化的な類似性と国家への忠誠心を重視すると、合衆国にいる日本人、とりわけ二世と、日本人々をを区別することには難しさがあつた。それは、第二次世界大戦中に、外国人と市民を、婉曲的に「再転住センター」と呼んだ強制収容所に不当に閉じ込めることで、再び、劇的に明らかになる。同様の難しさについては、今日も持続し、将来も日本が合衆国の好意を失うような出来事があると再び明らかになるという、暗い見通しが考えられる。

ザ・サンフランシスコ・モーニング・コール紙

ザ・サンフランシスコ・モーニング・コール紙は、早くも 1892 年には、日本人についての 2, 3 の賛辞で始まった 5 つの記事を載せ、さらに、契約労働について批判運動をするようになった。日本からの移民が、世紀転換期には、年間 12,000 人の水準に達すると予想した。実際の数字は、27,440 人であった。アイルランドから到着したデニス・カーニーを、最近世論に再登場させ、そのスローガンを「中国人は出て行け」から「日本人は出て行け」に変えるようにさせたことは別として、とくに注意を引くことはなかった。

ザ・サクラメント・ビー紙

V.S.マックラチーのもとで、ザ・サクラメント・ビー紙は、日本人を近寄せないように運動している排他主義者グループを支援した。1919 年、「黄金の西部の息子たち」の機関誌の論説は、「ビー紙が、出陣化粧をほどこし、関の声をあげた。もともと住んでいる息子や娘である我々は、何もしないままなのか、それとも、パイオニアたちを見習って、アメリカ人のためにカリフォルニアを守ろうとするのか？ ここには日本人の脅威があって、一致した行動をとる時は今だ」と述べた。

ザ・サクラメント・クロニクル紙

ザ・サクラメント・クロニクル紙は、1905 年にはじめて、反日本的な記事を載せた。2 月、中国人と同じように同化しない、少なくとも 1 万人の「小さな茶色い男たち」がいて、その状況は、さらに悪くなるばかりだと、断言している。(1910 年の国勢調査では、日本人は 1 万人となっている。) 以下のような、第一面全段ぶちぬき記事をはじめとして、数か月にわたって、こうした記事が現れた。

日本人が殺到、これが現在の問題だ 犯罪と貧困は、アジア人労働者と密接な関係がある 日本の移民会社は、どんなにか法律を破っている 茶色い男たちを不法に市民にしている 茶色い男たちは公立学校の害悪 日本人の大人が子どもたちを押し出している 黄色い禍である日本人がどんなにか白人を押し出している 茶色い禍が全国的な均衡を装っている 茶色い職人が白人の脳を盗んでいる

日本が数年後に満州を席卷した時には、「ロシアとの戦争が終わったとたん、茶色い日本人移民の流れが氾濫する激流のようになった」。学校での分離の危機の間(前掲)、ザ・クロニクル紙は「我々の人種の考えは、示された」と書いた。

3年後、その編集者は、「反対するのが一般的で、もし排斥について投票があれば、1879年の反中国人移民の時とほぼ同じくらいに全員一致の結果に近いだろう」と書いている。

ザ・サンフランシスコ・イグザミナー紙

ウィリアム・ランドルフ・ハーストが所有するザ・イグザミナー紙は、黄色い禍の恐怖を宣伝する道具となっていた。

書籍と煽動

1909年から1920年にかけて、大衆の反日本人感情を煽る本が4冊書かれた。先住民主義者で、社会進化論者で、軍国主義者のホーマー・リーは、『無知の勇氣』の中で、来るべき対日戦争について警告している。

ロートロップ・ストダード(3)の『白人世界の優越性に対する有色人種の上昇』のイントロダクションの中で、別の作家であるマジソン・グラント(4)は次のように書いている。

有色人種の移民は、白人世界のすべての地域に脅威を与える、全世界的な禍なのである。すべての白人は、直近にも究極的にも、有色人種があふれることで、社会的に殺菌され、最終的には交替させられるか、吸収される可能性に晒されている。・・・黒人の血によって直ちに世界が圧倒される危険はないが、白人の血統が、アジアの血によって圧倒される危険は今すぐにもある。白人が障壁を建て維持しない限り、最終的には白人は消滅するだろう。・・・白人の文明は、今日、白人とともに広がっているのである。

ピーター・B・カイン(5)の「パロマーの誇り」とウォーレス・アーウィン(6)の「太陽の種」が1920年に、それぞれ、コスモポリタン誌とザ・サタデー・イヴニング・ポスト誌に連載され、後に本になった。悪者が日本人、ヒーローがアングロ・サクソン人で、悪者の魔手からカリフォルニアを救うのである。これらの本は、かなりの発行部数をあげ、かなりの注意を引いた。これらの本は、日本人排斥連盟が組織されたのと時を同じくして出現した。

映画と煽動

1909年から1920年までの間に、日本人を悪者として、あるいは、キリスト教徒に改宗して救われた人として描かれた映画が6本ある。

- 1909年 「日本人の侵略」
- 1913年 「死の機関」
- 1914年 「ザ・チート」

1914年 「神々の怒り」

1917年 「パトリア」

1920年 「西部の影」

「パトリア」は、ハースト系の会社、「西部の影」はアメリカ退役軍人会が制作したものである。

初期の映画では、有名な早川雪洲(7)が登場し、中国人や日本人の役を演じている。それらは、物静かで、卑屈で、不可解な東洋人のステレオタイプを固定的なものとした。「神々の怒り」の後、かれは、恋愛映画の主演を演じる唯一のアジア系俳優になったが、映画評論家のディームズ・テイラーによれば、早川は、人種的偏見のために、映画の最後の場面でいつもヒロインを手放さなければならなかった。

ピーター・ローリが魅力的で機敏な日本人秘密諜報部員を好演する探偵映画「ミスター・モト」シリーズ(8)が、1938年には人々の心に顕著になった黄禍論のイメージに合わないという理由で中止された。

日本の軍事的侵略と、こちらの経済恐慌は、「狡猾で、信頼できず、不正直な」というネガティブなアジア人のステレオタイプを、日本人に当てはめることになった。

20年代に、ある映画を見た人は、次のように述べている。

2, 3年前、日本人は、映画の中で常に悪役として現れていた。私はこれまで、個人的にこの人種の誰とも知り合いになったことはない。しかし、この小さな者たちに嫌悪感をもつようになった。

どんな映画やテレビ番組がステレオタイプを固定化するか、テレビの再放映で広く視聴者の目によって、注意深く検討されるべきである。「ジャップ」や「ニップ」など、「マッケイルズ・ネイヴィー」シリーズ(9)のような戦争映画で使われた中傷的な言葉や、ステレオタイプ的な性格付けは、視聴者に偏見や差別の種を植え付けることを助長するのである。

5. 移民制限の法的意味

紳士協定

「ほんの少数の子どもたちに関わる、サンフランシスコ教育委員会の通常の決定が、日本人問題を、全国的かつ国際的なスポットライトの中に投げ入れた」。ロジャー・ダニエルズは、そのように教育委員会の危機について書いている。それは、フランクリン・ローズヴェルト大統領の干渉を招き、最終的には紳士協定と呼ばれる秘密協定を日本と結ぶことで終わった。

1906年11月11日、教育委員会はすべての日本人と韓国人の児童に、中国人の児童が通っている東洋人学校に入るように命令を出した。

地元の新聞はこの問題を見放したが、日本の新聞は強い反対を表明した。ローズヴェルト大統領は、わずか 13 か月前にロシアに屈辱を与えた日本との関係に市当局の行動が悪い影響を与えると考え、商務長官と労働長官を送って調査させた。この問題が根深い敵対関係のあらわれであるとわかると、彼は日本人移民の流入を食い止めようとはかると同時に、これまでは認めてなかった日本人の帰化を開始するそぶりを見せた。

ローズヴェルトは 1907 年、日本人がハワイ、メキシコ、カナダからアメリカに出国することを禁止する行政命令を出した。彼はエリユー・ルート国務長官に日本大使と交渉することを委ね、数か月の交渉後、紳士協定と呼ばれることになる協定を日本と結んだ。1924 年に日本人排斥法が可決するまで、この協定の正確な文章は明らかにされなかった。

移民局長官の報告書を通じてわかったのは、日本政府が、1)非労働者、2)再入国の労働者、3)定住労働者の両親、妻、子どもたちに限りパスポートを発行することを約定したことである。これが移民を減らす最初的手段だった。そのかわり、合衆国政府は、サンフランシスコの学校分離を終わらせ、合衆国内に住んでいる日本人に対する差別的な法律案を可決させないことを約束した。

移民の数は 1908 年の 16,418 人から 1909 年の 3,275 人に劇的に減った。しかしながら、排斥主義者が落胆したことには、移民を完全に遮断できなかったのである。排斥主義者が不満に思うには二つ理由があった。一つには、カリフォルニアでは農地を所有していないが故に非熟練労働者とみなされたにも拘わらず、日本政府が幾人かの人々を熟練労働者としたことである。もう一つは、女性たちが、日本で仮の結婚式を挙げてこちらに住んでいる男性の妻として合衆国に出国していることである。女性の名前が夫の戸籍に入ることが結婚することであるという日本的な考え方のために、日本政府は、写真と情報を交換して結婚を調べた女性にパスポートを発行していた。この写真の交換は「写真花嫁」という用語になった。この習慣は他の移民集団でも偶発的に行われることがある。12 年の間、間断なく、こうした花嫁が流入し、「東洋人の裏切り」のもう一つの例として排斥主義者に利用された。

ダニエルズは、書いている。

紳士協定はカリフォルニア人には排斥と受け入れられた。ローズヴェルトとルートは、その言葉どおり、何千人もの日本人女性が合衆国にやって来ることを理解していたが、これをそれまで調査したことはなかった。それをやって、その結果を予知損なうという最初の大失敗をした。国務省は、入国者数より出国者数の方が多いという初期の統計によって催眠術をかけられたようになり、カリフォルニア人ならすぐに気付くことを何年も認識出来なかった。それは、日本人女性が夫と一緒にになると赤ちゃんを産むということである。この赤ちゃんが合衆国市民になることは、生まれた場所に関係なく「ジャップはジャップだ」と主張するカリフォルニア人と同じである。

もしワシントンがカリフォルニアで起こっていることをはじめから認識して、カリフォルニア人に日本人の女性の入国を制限することが可能であることを理解させていたら、将来起こる煽動をある程度はさけることができていただろう。それが起こってしまったので、ワシントンの認識不足とカリフォルニアにおける偏見が組み合わさって、必然的に、反日本人運動は、減少することもなく、増大したのである。

日本人への身体的な暴力と、市レベルの差別があった。ザ・サンフランシスコ・クロニクル紙はより穏便であったが、ハースト系の新聞が日本やアメリカにいる日本人の両方に対して罵詈雑言を高めていた。

1908年以後、反日本人運動の中核は、サンフランシスコではなくなった。1913年に外国人土地法が可決するまで、農村地域、特にセントラル・ヴァレーに移動した。

統計からわかることだが、初期の数年間、女性は出国しなかったため、男性の数が女性をかなり上回っていた。イチハシはこの不幸な状況を次のように記述している。

1920年に、大人の男性の42.5%は独身者である。加えて、日本人の大部分が住むカリフォルニア州では、日本人と白人の異人種間結婚は、禁止されている。これらの事実は、明らかに女性がやってくる理由となっている。日本人も人間であり、彼らの結婚についての態度は、他の人間たちと変わることはない。しかし、同時に、その頃（1905年頃）、日本人の多くが、経済的にも結婚を考えるようになり、実際に多くが結婚したのも事実である。しかし、1921年に日本政府がアメリカ人の敵意を理由に女性の出国を差し止めたことにより、日本人男性は結婚する権利を奪われたのである。この結果、独身生活を続けていた大人の男性の42.5%は、独身のままであることを強いられた。多くの彼らの見通しは、みじめで希望のないものであった。・・・このことが、日本人の若い男性や中年の男性が置かれた不自然で不公平な立場に反映しないことはあり得なかった。誰がこの状況を非難されるようとも、社会がその責任から逃れることはできないのである。

1921年、連邦議会は、中央、南、東ヨーロッパからの新しい移民を抑制するため、割当制度の臨時の基準を可決させた。それは、1910年の国勢調査に基づいて、移民人口の3%を合衆国に入国することを許可するものであった。移民に関する条約も協定も持たない国については免除されていたので、この法律は日本人には適用されなかったのである。

しかしながら、排斥主義者は活動的で、カリフォルニア州議会は、排斥法の可決成立に関して連邦議会に請願することを議決した。

1924年の割当法（排日移民法）

北ヨーロッパ人に有利な割当を縮小すること、「市民権取得不能外国人」の排斥を議会に要求する法案が提出されたのは、この法律の議決の一年前であった。マクラッチーや、フェラン前上院議員、カリフォルニア州弁護士ユリシーズ・S・ウェップなどの排斥主義者の指導者たちは、反対派の上院議員に絞って働きかけた。上院の公聴会で、マクラッチーは次のように述べた。

すべての市民権取得不能民族のうち、日本人は最も同化しにくく、この国にとって最も危険である。彼らは、その強い民族的誇りによって、融合するという意味での同化をしようという考えは持っていない。彼らは、その民族的・国家的アイデンティティを捨てるという欲求も意志もまったく持たずにやってくる。彼らは、明らかにそして公然と、移住して堂々たる大和民族をここに永遠に定着させることを目的に、ここに来ている。彼らは日本人であることをやめない。・・・この国をこの民族の植民地にするという意志を追求するために、土地を保持して大家族を形成しようとしている。・・・彼らは、他の市民権取得不能の黄色や褐色の人種と比べてより大きなエネルギーとより強い決意と意欲を持っている。また、彼らは、同じように低い生活水準で、時間給労働で、婦女子労働でありながらも、経済においてより危険な競争相手になっている。

何人かの上院議員は、ヨーロッパ人と同じ割合を日本人にも当てはめたいとした。これによれば、毎年 146 人が入国できることになる。国務長官チャールズ・E・ヒューズは、割当制と紳士協定の拡大による二重の抑制を提案した。議員たちは、協定の交渉と回答における長官のやり方に反対した。ヒューズは日本大使(10)にこの協定についての見解を要求した。大使は次のように答えた。

・・・排斥条項の明らかな目的は、一つの国民として日本人を選び出し、アメリカ人の目から見て、価値のない望ましくないものとして焼き印を押すためである。もし提案されている法案が可決成立したら、この特別な事項の実際の結果、年間 146 名の日本人も排斥するためのものとなるだろう。一方で、146 名を除外するために提案された日本人排斥条項が成立することで、実際に、紳士協定は完全に終了する。常に国家間の外交において正義の原理と公正な方法を支持している偉大な国家の国民の努力が、年間 146 名の日本人を排斥するためという目的で、あなた方との友好関係を維持しようと努力するのに常に真剣で勤勉である友好国のプライドを著しく傷つただけではなく、また彼らの政府あるいは少なくともその一部の信頼と名誉の問題に巻き込むかもしれないような方法に頼ろうとしていることは信じがたい。

常にあなたが私に十分に示してくれた信用に頼って、我々の二国間でそれぞれ

れ幸福で互いに有利な関係を必然的にもたらずような特別な条項を保持する方法の設定という重大なる結果を実現するように、わたしはあなたに、とても率直にそして最も友好的な精神で、これらのことを述べてきたし、何度も繰り返してきたのである。

マサチューセッツ選出の上院議員ヘンリー・カボット・ロッジは、この「重大なる結果」という言葉を合衆国に対するベールに包んだ脅迫であるとして、「どんな国からのベールに包んだ脅迫の行使によっても法律を作るべきではない」と抗議した。日本大使は、以下のように説明した。

私には、脅迫というような意味であると解釈されうる文脈でこの二語を理解することはできない。この言葉を使う場合、不愉快で、無礼な、また「ベールに包んだ脅迫」と伝わるようなやり方を考えたことはない。

これはダメージとなった。上院は、紳士協定を無効する投票を行い、すぐのちに排斥法が可決成立された。

駐日アメリカ大使は、この法律に反対して辞任した。西海岸の新聞は、喜びに満ちた態度で反応した。日本の新聞は、辛口の論説を出した。イチハシは、その怒りの反応を次のように説明している。

出移民に関して、および他の列強との関係において平等の権利を享有したいという日本の願いは、誤った解釈をされ、日本が都合の良い時にいつでも多数の日本人を送りたいと願っていると誤解されてしまった。その問題の事実は、国際関係における民族的平等という日本の態度自体で、もともと出移民とは関係なかったのである。根本的な原則は、政治的公正である。自尊心のある国家で、民族のことで差別されることを許す国家はない。

1900年から1924年までの間に、ヨーロッパから合衆国への流入が1,500万人を超えた一方で、やってきた日本人は25万人より少なかった。日本の民族的プライドは傷つけられた。リベラルな西歐的リーダーシップは弱くなり、軍国主義者が政府の権力を上回った。

アメリカの土地にいる日本人にとって、この法律の可決は、移民の世話をするはずの仕事を失うことを意味し、土地を所有することや市民権を取得することの可能性がなくなり、親族の入国がなくなったことを意味した。希望へのすべての道が閉ざされた彼らに残ったのは、彼らの二世の子どもたちの将来が彼らに与えられるかもしれないという希望である。

他の抑圧的法律

一世が土地を所有する機会、彼らの技術や経歴に釣り合った雇用を求める機会、端的に言えば、アメリカン・ライフに完全に参加する機会を、事実上、失わせる言葉は、「市民権取得不能外国人」という言葉である。この類型化は、日本人と他の民族グループに適用され、カリフォルニア人によって、日本人を特定の職業や、免許を必要とする商売や、不動産を購入することから締め出す法律の可決に利用された。1950年の時点で、一世や、この類型に当てはまる外国人の権利を制限する、ローカル、州および国レベルの法律が 500 もあった。

今世紀の初期の数十年において、カリフォルニア州議会では、はっきりとした反日本的な法案の提出なくして会議が開催されることはなかった。1909年の会議では、17の法案が提出され、1913年の会議では、30以上が提案された。

1913年の外国人土地法

反日本人的な党派の最初の重要な勝利は、1913年の外国人土地法が州レベルで可決成立された時であった。この法律の特徴は、「市民権取得不能外国人」が農地を購入できなくすることであった。

議員たちは、詭弁的やり方において、非アジア人に該当する「市民権取得可能な全外国人」と「それ以外の全外国人」という言葉を、不快な「市民権取得不能外国人」の代わりに使った。州知事のハイラム・ジョンソンは、この法律の可決成立で信用を得て、ローズヴェルト大統領に、以下のように大胆なことを書いた。

この法律を採択することで、私たちに罪はない。私たちは、差別をしていない。・・・私たちは、日本人や他の民族と言っていない。・・・もしこのことで差別をしているとするなら、合衆国が、誰が市民権を取得でき、誰が取得できないかを宣言した時点で、合衆国は差別していることになる。

この法律は、日本人が土地を購入することを禁じ、また、農地を長期間にわたって改良をさせないように、その借用をたった3年間に限定した。その意図は、日本人を「腰をかがめる」労働者か白人の所有する土地のシェアクロッパーのままにしておき、独立自営農民になることを妨げるためのものであった。さらに、この法律は、日本人が、死亡した外国人から土地を遺贈されて所有する権利も禁じた。

外国人土地法可決成立について、カリフォルニアの正当性は、次のような議論によって構成されている。

- 1) ハイラム・ジョンソンによって指摘されているように、差別的な類型化をしている連邦政府に罪がある。
- 2) 日本では、外国人は、土地を所有できない。テオドア・ローズヴェルトでさえ、早くも1905年にこの論を利用している。日本では、法律はすべての外国人に適用されたように、すべての外国人が99年間借用できたという、もっともらしい議論

があるので、合衆国で外国人の同一の法的待遇が不公平に変更されると、それはすべて間違いなく差別とみなされる。

日本人は、この法律のどう見ても差別的な面と闘うために、二つの方法をとった。敏腕の銀行家で、新聞発行人で、リビングストンで土地開発団のスポンサーとなっていた安孫子久太郎という人物とその弁護士は、一世市民の子どもが大人になるまで「信託」によって不動産を所有する権利を行使した。

憲法および州法を支持することを誓っているが、外国人土地法の問題は、外国土地法の問題を破ることを助けるために法的な能力を売り渡す弁護士たちがこの州にいることは、至極遺憾なことの原因なのである。

日本政府は、この法律の可決成立を激しい侮辱であるととらえ、条約上の諸権利を侵したと抗議した。実際には、条約上の権利を侵しているわけではないが、この法律の侮辱的な性格は、見まごうことなく明らかである。

カリフォルニア以外の新聞の大多数は、日本との関係において有害な影響があるとして、基本的にはこの法律に反対した。カリフォルニアの反応は、知事によって次のように表明された。

私は、我々が幽霊を封じたと思う。カリフォルニアでは、日本人問題は、我々が望まない限り、二度とふたたび政治的な問題になることはない。

1920年の外国人土地法

「黄金の西部の息子たち」は、1919年に、「カリフォルニアを救うのはただ一つ、日本人が土地を所有することを不可能にする州法を作るしかない」と決めた。「黄金の西部の娘たち」とアメリカ退役軍人会とともに、1921年の議会に先立って、1920年のパロットで発議権を得るために十分な署名を集める運動の先頭に立った。

この方法の目的は、1913年の土地法の抜け穴をふさぐためのものであった。それは、土地が日本国民に譲渡されることを禁じ、日本人が株式の過半数を所有する会社が土地を購入したり借用したりすることを禁じ、子どもの名前で土地を購入することを防ぐために、一世が市民である子どもの後見人となることを禁じた。この規定は、憲法修正第14条が、市民の土地を所有する権利を侵害する権力を州に与えなくなつて以降は、違憲である。

注

- (1) Native Sons of the Golden West. 1875年にカリフォルニア州で設立された歴史的建物保存の団体。1848年の金鉱発見以後のゴールドラッシュ期に来た人々が建てた建物を保存することを目的に組織された。それは、1870年代に南北戦争で戦った退役者たちが大挙してカリフォルニ

アに來たことで、歴史的建物が失われることを憂いたのが始まり。現在も活動している。

- (2) **Loyal Order of Moose**. 1881年にケンタッキー州で結成されたクラブ団体。Elks Clubとライバル関係にある。この団体も、現在まだ活動している。(拙稿「1970年サンフランシスコにおける日系アメリカ人史学習の教材開発(3)」『歴史教育史研究』第7号、43ページに注釈している)
- (3) **Lothrop Stoddard**(1883-1950)、歴史学博士(ハーバード大学)で、ジャーナリスト。人種差別主義者。
- (4) **Madison Grant**(1865-1937)、弁護士、人類学者。
- (5) **Peter B. Kyne**(1880-1957)、小説家。
- (6) **Wallace Irwin** (1875-1959)、小説家、脚本家。
- (7) 早川雪洲(1886-1973)。千葉県生まれの日本人で、富裕な家に育ち、海軍兵学校をめざし勉学に励み、英語を得意科目にする。耳を負傷し、海軍士官をあきらめ、自暴自棄となっていた時に、近隣でアメリカ船が座礁し救助された船員のために通訳をして活躍した中で、アメリカ行き目指すようになった。1909年、横浜からシアトルに渡り、一時サンフランシスコで働いた後、シカゴ大学に入学し、アメリカンフットボール部で活躍する。大学卒業後、立ち寄ったロサンゼルスのリトルトーキョーで藤田東洋が率いる常盤正劇団の芝居に誘われたのがきっかけで、映画に出演することになる。それは、日本人男性が主役の「タイフーン」という芝居で、すでにニューヨークで評判になっていた。早川が主役を演じた芝居を観た大物の映画プロデューサートーマス・インスが、彼を主役に「タイフーン」を映画化することを持ちかけたのである。1914年、この映画が予想以上のヒットし、彼は一躍スターの道を歩むことになった。1915年には、名監督セシル・デミルの作品に連続して出演したが、特に「ザ・チート」では、借金を申し込んだ白人夫人を誘惑する日本人男性を演じ、悪役ながらその魅力に酔った女性観客のアイドルとなり、巨額の報酬を得て、ハリウッドに豪邸を持つほどになった。そんな早川に対し、現地の日系人たちは、複雑な感情を持ったという。日頃、白人から偏見と差別を受けていた日系人にとって、白人社会で活躍する早川は英雄であったが、一方で、劇中で悪役を演じることを嫌う向きもあった。また、日本国内では、国辱的であるとして非難された。その後、自らの映画製作会社を作るまでになったが、カリフォルニアで排日色が濃くなり身の危険を感じる事件も発生したため、1923年にハリウッドを去り、ニューヨークに移った。ニューヨークでは芝居で高い評価を得たところを、フランスの映画プロデューサーに「ラ・バタイユ」という、日本海海戦を描いた映画で東郷平八郎を演じるように要請され、パリに渡った。この映画が大ヒットとなり、その後、早川は、戦後までパリを中心にヨーロッパで活動することになる。1957年にアメリカ映画の「戦場にかかる橋」で日本軍将校を演じて、アカデミー賞助演男優賞にノミネートされたのは、有名な話である。
早川の生涯については、自伝として『武者修行世界を行く』(実業之日本社、1959年)があるが、野上英之の評伝『聖林の王 早川雪洲』(社会思想社、1986年)が参考になった。
- (8) **Mister Moto**. 原作は、アメリカの作家 John P. Marquand (1893-1960) の小説『ミカドの密偵』6編で、2年間(1937-39)に8本の映画が作られた。この映画で、主人公の元賢太郎を演じたのは、ハンガリー出身の白人俳優ピーター・ローレである。彼は、小柄で、度の強い眼鏡をかけ、日本人に扮した。(能登路雅子「ハリウッド映画の日本人像」鶴田欣也・平川祐弘編著

『外国人の日本人像・日本人の外国人像 内なる壁』TBSブリタニカ、1990年、を参照)

このシリーズ小説の日本語訳本で、筆者が見出したのは、唯一、新庄哲夫訳『ミスター・モトの大冒険 天皇の密偵』(サンケイ出版、1977年)である。同書で訳者が著した「解説」によれば、マーカンドは、「東部のデラウェア州ウィルミントンに生まれ、ハーバード大学を出て新聞記者になったが、第一次大戦に陸軍中尉として出征、砲兵隊を指揮した。豊富な軍事知識、国際情勢に対する深い理解力はこの時代に養われたもので、それがミスター・モト・シリーズで巧みに生かされています。そのためかどうか、第二次大戦中は、太平洋方面で、対日工作に従事したこともあります。復員後(第一次大戦)、いったん記者生活にもどるが、作家を志して広告会社のコピーライターに転じ、当時、週刊誌で最大の部数を誇る『ザ・サタデー・イブニング・ポスト』誌の定期寄稿家となりました」と紹介されている。このシリーズも、同誌に、1935年3月30日から連載されたものである。その直前、マーカンドは、同誌から横浜、東京、下関、釜山、奉天、北京を回る取材旅行に派遣されている。また「解説」は、ミスター・モトについて、「言葉づかいがおだやかで、すこぶる慇懃な I・A・モト氏は、日本ナンバーワンの秘密諜報部員である。小柄な体格に似あわぬ怪力に加えて柔術の道をきわめ、赤子の手をひねるように敵対者を倒すことができる。(中略)非常に禁欲的で『水のように静的』な人物として登場します。(中略)ミスター・モトの魅力はなんとといっても、そのシニカルな『慇懃無礼さ』にあります。」と紹介されている。ただ、『金歯を光らせて、やたらソー・ソーリー』とくり返すところが日本人の自己嫌悪を誘発する」のが日本人社会に受け入れにくかった要因だと分析されている。

- (9) 原語は、McHale's Navy。詳しくは、拙稿、前掲、注釈を参照。
- (10) この日本大使は、埴原正直(1876~1934)。1924年に、「排日移民法」が成立してしまうのは、下院が日本人排斥条項を割当法に含めることに賛成したのに対し、埴原が当時のクリーッジ共和党政権の国務長官チャールズ・エヴァンズ・ヒューズに宛てた文書中に使った「重大なる結果 (grave consequences)」という語がアメリカ合衆国に対する脅迫であるとして、伝統的な外交関係を尊重し反対するだろうと予想されていた上院が賛成に回った結果である。この問題については、蓑原俊洋『排日移民法と日米関係』(岩波書店、2002年)において詳細な分析がなされている。それによれば、ヒューズに届けられた埴原の文書が議会に示された際に、多くの議員が「重大なる結果」をとくに問題視しなかったにも拘らず、これを「覆面の威嚇 (veiled threat)」であると非難したロッジ上院議員は、ヒューズを嫌っていたからであるとされている。